

杉浦茂峰少尉

(台湾にある飛虎将軍廟)

教育問題プロジェクトチーム

榎本 眞己 陸自71

1 はじめに

先日、先輩・友人と一緒に台湾一周旅行をしてきた。案内をしてくれたのは日本の神戸大学を卒業した現地ガイドの「クー」さんです。新幹線からマイクロバスに乗り継ぎ台南に入った時に、クーさんが「コースには入っていないのですが、是非ここを見て帰って欲しい」と言って、案内してくれた所があります。

それは台南市の北西約5キロの郊外にある道教(中国固有の宗教)の廟で、地元の人々から鎮安堂「飛虎將軍」と呼ばれているものでした。「廟」とは日本の御社や御堂のようなものです。行ってみて驚いたことに、なんとこの廟に祭られている御祭神は、日本の帝国海軍飛行兵で、杉浦茂峰少尉(死後少尉に特別昇任、死亡時は兵曹長)という方でした。

今回はこの廟のことを皆様にご紹介しましょう。そして皆様と一緒に何故帝国海軍軍人がこの廟の御祭神として祀られるようになったかを考えてみたいと思います。

2 杉浦茂峰少尉について

杉浦茂峰氏は大正12年(1923年)11月9日、父満之助、母たねのの三男として茨城県水戸市で生まれました。そして五軒尋常小学校に入学し、三の丸尋常高等小学校を卒業し、昭和13年(1938年)、14歳で乙種飛行予科練習生として海軍に入隊し、霞ヶ浦海軍航空隊で基礎訓練を受けます。その後、昭和16年(1941年)、日米開戦の年に17歳で台湾の高雄海軍航空隊に異動し飛行練習生教程に進みます。

日清戦争後の下関条約により日本に割譲された台湾は、当時日本領であり、日本の南方進出の拠点でした。開戦当初は台湾への本格的な敵の航空攻撃はありませんでした。しかし昭和19年(1944年)ともなると、絶対国防圏(大東亜戦争で守勢に立った日本が本土防衛のため、絶対に確保しようとした外郭地点を連ねた地域)が破綻し、秋には連合軍によるフィリピンへの攻撃が、またその前には必ず台湾へも航空攻撃が行われるであろうと予測されました。

そのような折の10月12日、13日の両日及び14日午前中に米機動部隊は台湾及び南西諸島西部に連続して猛烈な航空攻撃を行います。連合艦隊司令長官は12日になって米機動部隊の位置をおおむね確認し、敵機動部隊を捕捉撃滅

する好機が来たと判断します。そして16日までの5日間、本土防衛に備えていた飛行機隊までも加え大規模な航空攻撃を行いました。これが「台湾沖航空戦」と呼ばれるものです。

当然、台南においても空襲があり、日米の空中戦が行われました。台南に12日に来襲したのは米海軍グラマン社のヘルキャット(F6F)30~40機です。これに対し、台南海軍航空隊と高雄海軍航空隊の零戦25機がそれぞれの基地を発進し、上空哨戒中の零戦と共に台南上空において空中戦を行います。

高雄海軍航空隊員であった杉浦兵曹長も零戦32型に乗り込み米軍機を迎えうちます。

地上でこの空中戦を見ていた地元の人によると、零戦2機が協力し合いながら戦っていたが、そのうちの1機が上手く敵をかわしたと思った時、もう1機が被弾したのか、尾翼部から火を吹き出し急降下をはじめたとのことです。このままでは下の集落である海尾寮に墜落し大惨事になると思っていた時、急降下していた零戦は急に機首を引き起こし、集落を避けるように東側の畑のある養殖池の方に向かっていきましました。きつとパイロットは炎上に伴う空中爆発の恐れの中、恐怖心と戦いながら操縦桿を握り締め機首を持ち上

げ、海尾寮の集落への墜落を避けようとしたのではと地元民は思ったそうです。炎上する零戦は養殖池上空まで飛んでいった時にパイロットがパラシュートを使って脱出します。ほぼ同時に零戦は空中爆発したそうです。しかし、この脱出したパイロットを米グラマンは機銃掃射します。このためパラシュートは破れ、パイロットは地上に叩きつけられます。畑の中に墜落したの靴には「杉浦」と書かれていました。後ほど、この戦死したパイロットが杉浦兵曹長であることがわかりました。享年は20(後1カ月で21歳)でした。この戦闘で日本軍は米軍機7機、10機を撃墜するも、自爆と未帰還機計17機(内、台南航空隊は8機)の損害を出します。杉浦少尉(死後特別昇任)他、本戦闘で戦死した戦死者は翌年、高雄の海軍航空隊で海軍合同葬が執り行われます。また杉浦少尉は水戸でも他の戦死者との合同葬が行われたとのことでした。



(故)杉浦茂峰少尉
(鎮安堂「飛虎將軍」バンフレットから)

3 廟の創建と建て替え

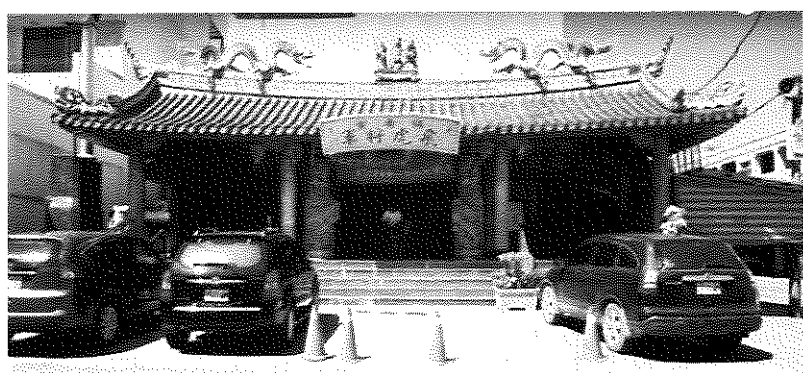
終戦後数年経った頃、部落の人が、白い帽子を被り、白い服を着た人が養殖池付近を徘徊するのを目撃します。最初は闇夜に紛れ、魚を盗みに来た者かと思いい、追いかけますが姿が見えなくなり。その後この不思議な現象を見た人が増え、ある人は夢にまで出てきたと話し、人々は恐ろしかったり、怖がったりします。しかも当時、農業は不作続きで、魚の養殖もうまくいっていませんでした。

そこでこの不作・不漁の原因を含め、この白い服を着た人物について海尾寮の集落の守り神である海尾朝皇宮の「保生大帝」(宋時代、福建省の医者で多くの人々を救済。死後は神となり国を守り民心を安定)にお尋ねしたところ、白い服を着た者は戦時中の戦死者の亡霊であり、亡くなった者を集落の人々がお祀りしていないことが不作・不漁の原因だとのことお告げがありました。

そこで村人たちは、この亡霊は戦時中集落への墜落を避けるため、自分の命を犠牲にした零戦のパイロットではないかと考えます。そしてこの恩人に感謝の念を捧げるため昭和46年(1971年)に4坪の土地に祠(小規模な廟)を建てます。この際、親守となつた朝皇宮の「保生大帝」は杉浦

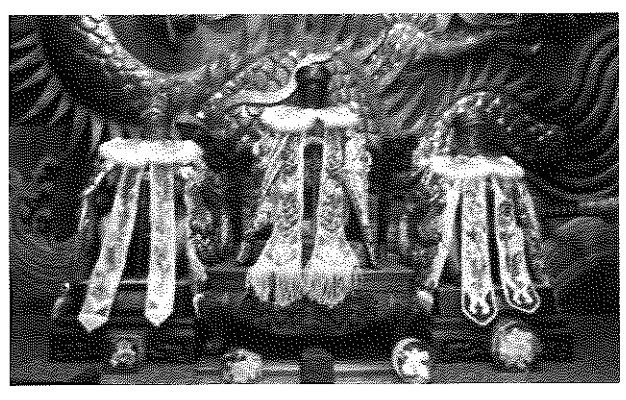
少尉に「飛虎將軍」(飛虎は戦闘機、將軍は杉浦少尉への敬称)の称号を与えます。祠を建て飛虎將軍をお祀りすると、畑は豊作となり魚の養殖も順調となり宝くじを当てた村人まで出るようになり、一層の尊崇を集め、毎日参拝者が絶えないようになります。

そこで、平成5年(1993年)、海尾朝皇宮管理委員会の提案で祠を再



建することを決めます。出来上がったものは敷地50坪のきらびやかな造りの廟となりました。朱色の屋根瓦、それを支える柱は大理石の豪華なもので、その柱には「正義」「護国」「英雄」「忠義」「大義」と、飛虎將軍に対する崇敬と祭神を讃えた言葉が書かれています。床もイタリア産の大理石で、その外見は、上の写真に見られるとおりです。

また下の写真に見られるように正殿に鎮座する「杉浦茂峰」の御神像は、両側に分身2体が奉安されています。廟守は朝夕2回、煙草を3本点火して



神像に捧げ、朝7時には国歌「君が代」を、夕方4時には「海ゆかば」を流します。供卓の両側には中華民国と日本の国旗が立てられています。これらは全て信者の奉獻で再建され、運営されています。私達がお参りに訪れた際にも、管理人の方が「君が代」と「海ゆかば」の演奏を流して下さいましたので、斉唱し英霊を慰霊しました。

4 その後

(1) 子供たちの教育に活用

評論家の江崎道朗氏が昨年この廟を訪れた時のことを「江崎道朗のネットブリーフィング(第18回)」(日刊SPA 2017年8月16日)で紹介しておられます。その中で飛虎將軍のことが地元の子供たちの教育に活用されていると次のように述べられています。

「その日の夜、飛虎將軍廟近くの料理屋で、飛虎將軍廟の関係者と会食をした。その会食に出席した地元の小学校の先生によれば、『飛虎將軍の心に触れ、子供たちに思いやりの心をもってほしい』として、近年では、飛虎將軍のエピソードを郷土史として教えており、学芸会では児童たちが杉浦氏の人生を演じているという」
また、台湾の民間芸能である布袋(ほてい)芝居という人形劇で「鎮安



飛虎將軍の御神体とともに里帰り
(水戸市ホームページから)

堂「飛虎將軍」をYouTube (https://www.youtube.com/watch?v=jBbNWjENw&list=PL898) で見るのが出来ます。これは飛虎將軍廟を管理する海尾朝皇宮の方々により作成されたもので、飛虎將軍の事跡の啓蒙用だそうです。

(2) 新たな日台交流

この飛虎將軍廟の存在が、東日本大震災時の台湾からの支援に感謝するたため、台湾を訪れた日本人が知るようになります。その一人が三重県の中村文昭さんです。中村さんは、お祭りの際に飛虎將軍が乗る神輿がないことを知

り、神輿を作るための募金活動を日本で始めます。そして平成27年(2015年)3月10日に中村さん他60人の日本人が台湾を訪問し、日本式の神輿を模した海尾朝皇宮の吳進池氏のデザインによる神輿を届けます。そして4月30日の飛虎將軍廟のお祭りで正式にこれが公開されました。

このことがきっかけとなり、杉浦少尉の没後72年となる平成28年(2016年)9月に海尾朝皇宮廟管理委員会26人が、飛虎將軍の御神体を中華航空の客室に乗せて水戸市に里帰りのため来日しました。そして9月22日には茨城県護国神社にて水戸市長、水戸市議、会議長など多数の参列者のなか慰霊祭が行われます。さらに訪問団は飛虎將軍の御神体とともに生家跡地や卒業した三の丸小学校、五軒小学校などを訪れたばかりでなく、御神体を神輿に乗せて市街地の中心を巡行しました。

5 どうして?

どうして帝国海軍軍人が異国で御祭神として祀られるようになったのでしょうか。それは20歳の若い青年が自分の命と引き換えにとった自己犠牲の行動に地元の人々が感動し、感謝の気持ちを表すためだったのでしょう。しかし祠が建てられた昭和46年(1971年)当時、台湾政府は日本文化を排斥

していた時期です。にもかかわらずどうしてかを、もう少し深く考えてみましょう。

まず台湾の人は物故者、特に戦没者を哀れむ気持ち強いそうです。しかも道教は中国、古代の民間信仰を基盤とし、不老長生・現世利益を主たる目的として自然発生的に生まれた宗教で、多神教ですので極めておろからかです。現世利益については、クーさんも「道教が信心されるのは実利的な期待もある」と言っておりました。

次いで戦後の日本人への台湾人の国民感情について説明しましょう。明や清から台湾は「化外の地」(中華文明外の地)と呼ばれていました。それを日本は大東亜戦争に敗戦するまでの50年間(1895年~1945年)、「本土の一部」あるいは「内地の延長」のように統治します。これによりアヘンの撲滅をはじめとする衛生状態の改善、農業技術の向上、産業の振興、これ等に伴う鉄道の敷設やダムを含む下水道敷設等のインフラ整備等を行っていたのです。しかも系統だった教育が行われていなかった台湾に帝国大学のみならず、北海道には未設置だった旧制高校まで設置した他、医学等の各種高等専門学校を設ける等の教育も充実させたのです。

しかし日本の敗戦に伴い日本人は帰

国し、蒋介石率いる南京国民政府軍が軍人と官吏を派遣します。そして昭和24年(1949年)に蒋介石は毛沢東に追われ、南京国民政府の軍人や官吏を引き連れて台湾に移住してきました。

新たに来た国民党軍兵士による強奪や官吏の腐敗ぶりは目に余るものがあり、民衆が反発します。このため蒋介石は反対派の知識階層等を処刑します。この際、知識層の根源にある日本色を払拭すべく日本の造った建物の破壊や日本教育を受けた知識人の多くを処刑しました。このため台湾の人々は「犬が去って、豚が来た」(日本人はうるさく吠えても番犬として役立つが、中国人は食欲で汚いという意味)と揶揄します。このようなことから蒋介石は戒厳令を敷き、恐怖政治を行います。この蒋介石と息子の蔣経国が亡くなった後、昭和63年(1988年)に李登輝氏が総統(大統領と同じ)になります。以降、台湾でも民主化が進み、言論の自由などが認められるようになります。

台湾の民主化がすすむまでは、日本軍人を祭神とする「飛虎將軍」のことは余り大げらにできなかったのではと思われまふ。しかし民主化がすすんだことにより「飛虎將軍廟」を大きくすることが話し合われ、平成5年

(1993年)には今あるような50坪もの広い敷地を有する「鎮安堂・飛虎將軍廟」に建て替えられたのです。

どうでしょう？「祠を建立することによる実利的なことはあったにせよ、もし地元の人々が日本統治時代の日本人を忌み嫌っていたならば、このようなことはあり得ないのではないのでしょうか。

6 おわりに

是非、皆様に杉浦少尉は何故、自分の命が危うい中、集落を避け畑のある養殖池の方に飛んでいったかを考えて頂きたいのです。確かにそれは自己犠牲の精神でしょうが、その精神がいざという時にどうして発揮できたかです。

きつと杉浦兵曹長は14歳で乙種飛行予科練習生となった時から一貫して国を守ることに真摯(まじし)だったのです。国を守ることは、自分たちが住んでいる国土や国民、さらには自分たちの文化を守ることです。日本の一部であった台湾の人々も当時は日本人です。『今自分が脱出し、機体がこのまま墜落したのなら、海尾寮の部落の人々が焼け死んでしまふ。この人達を焼き殺しては国を守ることはならない』と、杉浦兵曹長は瞬時に思い咄嗟(とつさ)に機首を上げるために操縦桿を引いたのでしよう。

これが使命感というものであり、この使命感が透徹していたのです。

使命感は何も国を守ることだけに必要なものではありません。

これを読まれた若い皆様方がこれから生きていく上で、大事な目的や目標を必死の思いでやり遂げようとすると必要とするものであり、時にくじけそうになる自分を奮い立たせ、やる気を起こさせてくれるのは、常にこの使命感がいかに透徹しているかに拠るのです。

備考・杉浦少尉の死亡時を除く軍歴年次及び年齢は推定による。

【参考資料】

○鎮安堂「飛虎將軍」パンフレット(台南市海

尾朝皇宮管理委員会管轄鎮安堂)

○日刊SPA!「江崎道朗のネットブリーフィング(第18回)・・・2017年8月16日

○水戸市ホームページ「飛虎將軍」故杉浦茂峰氏について

○飛虎將軍廟ホームページ(台南市海尾朝皇宮管理委員会管轄鎮安堂)

○戦史叢書「海軍航空隊概史」(角田求士編纂)

○「空の彼方・海軍基地航空部隊要覧」渡辺博史編(発行所)楽學庵

○日中出版「台湾入門」酒井亨著